

シジミシンポジウム

「貴重な水産資源十三湖のヤマトシジミを考える」

本県における十三湖、小川原湖は日本でも有数の汽水湖として、貴重なヤマトシジミの安定生産が続いている。

十三湖でシジミ漁業を行っているのは、十三漁協、車力漁協で一六六人の組合員が漁業を営んでおり、生産額は年間十数億円円で九十%以上がこのヤマトシジミで漁業経営が成り立っている。

この貴重なヤマトシジミを永続的に守り育てて行くには、その生態と環境保全が最も大切であり、去る三月二十一日県漁業環境保全振興協会主催のシジミシンポジウムが五所川原市において西北漁業関係者及び一般者約千人が参加し開催された。

始めに、ヤマトシジミの研究の第一人者である島根県内水面水産試験場長（水産学博士）の中村幹雄場長が「ヤマトシジミの生態と環境について」と題して基調講演を行った。この中で中村氏は「ヤマトシジミは適した環境があれば増え続けるとともに、水中のリン窒素を体内に取り込んで分解する作用があり、湖の浄化の役割を果たしている。環境保全をしながら守っていかなければならない」と語った。

基調講演終了後はパネルディスカッションが行われ、コーディネーターには北海道大学水産学部の中尾繁教授、パネラーには青森大学大学院環境科学研究科の山口秀明講師、十三漁協の工藤伍郎組合長、車力漁協の羽場周次郎組合長、小川原湖漁協の沼辺武志組合長に基調講演をしていただいた中村場長を加えて意見交換が行われた。

この中で、三組合長はいづれも消費者が安心して食べられるシジミを生産していくことが我々の使命であり、環境保全が最も大切であると話していた。

また、中村場長はダイオキシン問題に消費者は神経質になっていて、ゴミ焼却施設の十三湖岸設置場所には疑問があり、もっと地域全体で話し合っほしいと語った。山口講師は、十三湖岸に設置される焼却施設は最先端のもので、有毒科学物質は現在のところ心配ないと思われるが、施設工事で土砂の流入など湖に何らかの影響を与えることが逆に心配である。環境にもっと関心をもってオープンな場で話し合うことが大切であると語った。

わが国の主なシジミ類漁場分布図



●十三湖

年度	数量(トン)	金額(千円)	平均単価kg/円
平成元年	1,655	312,469	188.8
2	1,760	324,809	184.6
3	1,860	324,521	174.5
4	2,017	460,821	228.5
5	1,611	441,027	273.8
6	1,601	410,250	256.2
7	2,407	694,757	288.6
8	2,629	831,027	316.1
9	2,185	877,214	401.5
10	2,068	928,804	449.1
11	2,495	1,039,138	416.5
12	2,680	1,082,203	403.8

●小川原湖

年度	数量(トン)	金額(千円)	平均単価kg/円
平成元年	3,544	1,169,520	330
2	3,544	1,169,520	330
3	3,544	1,063,200	300
4	3,650	1,095,096	300
5	3,285	1,412,674	430
6	2,348	1,010,000	430
7	2,033	854,091	420
8	2,097	989,649	471
9	2,428	1,137,715	468
10	2,504	1,179,824	491
11	2,496	1,026,268	411
12	2,094	904,858	432

●全国

年度	数量(トン)
平成元年	28,411
2	37,017
3	34,032
4	29,820
5	27,134
6	23,988
7	26,938
8	26,714
9	21,822



挨拶を述べる植村会長



基調講演する中村場長



中尾コーディネーター